

鶴岡型小中一貫教育を考える 市民のつどい 7日 明治ホールで

「鶴岡型小中一貫教育を考える市民のつどい」が5月7日、午後2時〜4時、東田川文化記念館・明治ホールで開かれます。

主催は「小中一貫教育を考える市民の会実行委員会」、共催が県教職員組合、後援が市教育委員会です。

藤島中学校改築にあわせて、藤島地域教育振興会議で、新たな「小

中一貫校」などが議論されています。

5月から住民説明会やアンケート調査が予定され、その前に情報をしっかりと共有しようと企画されました。

話題提供の予定者は、南波純氏（市議会議員・元藤島中学校教諭）、県教職員組合、地元の幼稚園、学童関係者などです。

「子どもが少なくな

っているの、学校が一つになるのは、本当にやむを得ないの？」

「小学校から中学校へ、子どもの成長の飛躍はどうなるの？」

「先行地域のメリットは本当なの？ デメリットはないの？」

「地域にどんな影響があるの？」など、話し合いがされ、どなたでも参加できます（資料代100円）。

鶴岡型 小中一貫教育 を考える 市民のつどい



▶ 藤島地域 で先行して計画が進む
「鶴岡型小中一貫教育」について

実行委員会、教職員組合、地元教育関係者などから現状と課題についての報告をいただき、参加者同士でさらに議論を深めていきましょう。

【参加対象】
○鶴岡市民 ○保護者 ○教育関係者

5月7日 日
午後2時〜
午後4時

東田川文化記念館明治ホール
参加費100円(資料代として)

藤島地域では昨年「藤島地域教育振興会議」が4回開催され、「鶴岡型小中一貫教育」について議論が重ねられてきました。5月からは各地域での説明会や地域住民へのアンケート調査も予定され、年度内には小中一貫教育に関する報告書の策定も予定されています。

しかし、なぜ「鶴岡型小中一貫教育」を藤島地区で先行するのか、そのメリット・デメリットは何なのかについての情報提供が十分になされていないのではないかという指摘もあります。

5月から始まる予定の住民説明会を前に、小中一貫教育に関する藤島地域教育振興会議や市議会での議論の経過を踏まえ、現状と課題について市民間での情報共有を図っていきたくと考えています。



【話題提供予定者】
・南波 純(鶴岡市議、元藤島中学校教諭)
・山形県教職員組合
(先行地域で現状と課題、藤島地区の教職員の声など)
・地元の幼稚園、学童関係者



▶ **グーグルフォーム**
での回答はこちら↓



【申し込み・お問い合わせ】
氏名・連絡先・地域・所属・年齢層を明記の上、実行委員会事務局まで下記のグーグルフォーム、メールまたはお電話でお申し込みください。
▶ Mail: sdgstsurugaoka1101@gmail.com (SDGs鶴ヶ岡)
▶ TEL: 0235-22-0087 (南波宅)

主催 小中一貫教育を考える市民の会実行委員会 共催 山形県教職員組合 後援 鶴岡市教育委員会 (市議会議員有志、山形県教職員組合、小中学生保護者、藤島地区教育関係者などで構成)

村の四季 44

鈴木重雄(八色木)

イナゴ(蝗) 捕り

平成20年(2008)、田んぼでイナゴが大発生し、家の中まで飛んでくる。

イナゴは稲作では害虫の部類に入るが、昔から人間にとっては貴重な栄養源だった。

私が小学校の頃、4年生以上の全校生徒は一斉にイナゴ捕りであった。子どもたちは手拭いを2ツ折りにして、袋を作ってもらい、直径3cm位の竹筒を10cm位の長さに切って、イナゴ袋を作った。

校庭の隅に、かまどを作り、イナゴを茹でる。

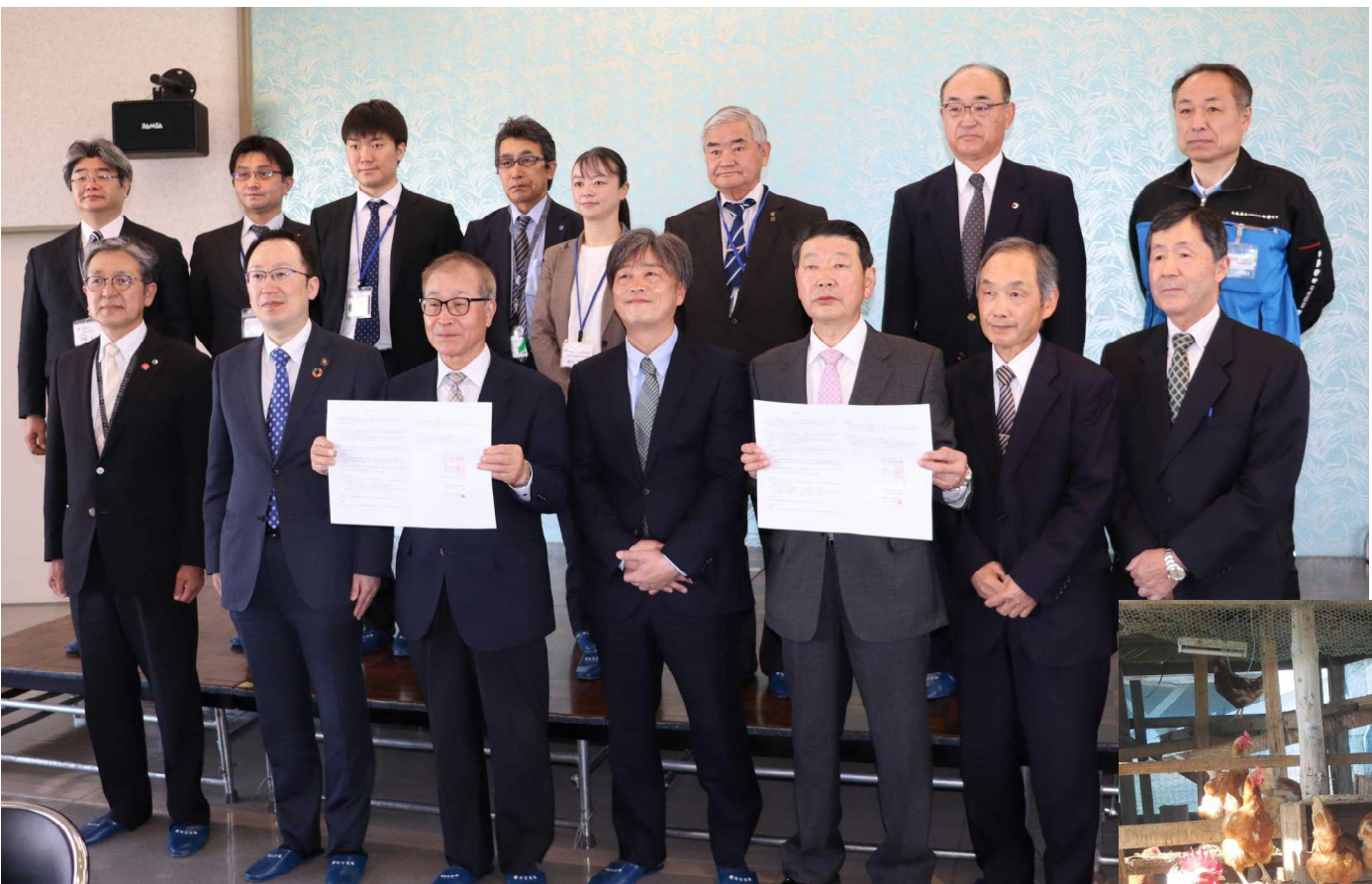
この日は学校のトドマ(用務員)は大忙しであった。朝会が終わると集落ごとに分かれて、お目当ての田んぼに向かう。稲の刈り終えた畦道の草を分けながら、捕らえて行く。

朝露が残っている頃は、イナゴも活動がにぶいので捕らえやすかった。お昼時間までに学校に帰る。

女の先生が、一人ひとりのイナゴを秤にかけて記録する。男の先生は大鍋にイナゴを入れる。学年ごと、集落ごとに集計するので、子どもたちは真面目であった。

新規就農と定住をサポートする協力協定

渡前地区自治振興会（近藤直志会長）と市立農業経営者育成学校・SEADS（シーズ、百瀬清昭校長）は20日、新規就農者の定住をサポートする協力協定を結びました。SEADS第1期生の佐藤直樹さん（51）が、宝徳で養鶏をスタートしたことがきっかけとなりました。



協定書を結んだ関係者、前列中央が佐藤直樹さん、左が百瀬清昭校長、右が近藤直志会長（写真提供・渡前地区地域活動センター）



右写真は、大阪から宝徳集落に移住し、就農した佐藤直樹さんの養鶏作業

ひと 村山俊太郎・ひで夫妻

青山 崇

5人の子たちと新しく歩む
ひでのレッドページ⑥
せつ子(中学2年生)
せつ子も中学2年生

になった。「わたしの家」を書いてから4年たつ。
せつ子はこの4年間を見つめ、家の中心になって頑張っている「お

かあさん」を書いた。およそ次のようなものである。

母の仕事がないことが、兄妹5人の小さな胸と母の胸を痛めた。仕事がなく家中でりんごの袋ほりをした。学校を回って本を売る行商人。「山形日報」

販売店で、子どもも配達区域を分担。中学校のそばで学用品販売店と、次々に変えたがどれも巧いかなかった。母の喜びは素晴らしなものだったとせつ子は書き、子どもたちもその夜はこれからの明るい生活を思い、楽しい一夜を過ごした。その夜とは、1954(昭和29)年6月、母が県教祖書記に決った夜のことである。末っ子の士郎はもう5年生になっていた。

貧乏に負けてはいけ



本性をさらけ出し

アベよりはハトではないかと思われていた岸田さん。首相になって時間が経ったら、タカの本性を露わにしてきたじゃないですか。しかも、売り言葉とは大違いで、聞く耳も無くなったでしょ。

▲先の大戦の反省から、憲法9条で、武器は持たない・戦争はしない、となっているものを、敵基地を先制攻撃できると言い始め、その為に安保3文書を書き換え、それに充てる金を捻じりだす法律を作ろうとしている。古いトマホークを買ってくれるのが可愛くて、肩を抱いてくれた大統領を安心させるためか。当然、福祉が犠牲に。

▲これも先の大戦の反省から、学術会議を独立させたのだが、何かに入らないかを明らかにせず6人の再任を

ない、金がない位で弱ってはいけない、金などはどうにかなる、学校だけは出ておかなね。母の励ましの言葉である。

これからもこの言葉をかみしめていこう。「なんぎな峠をもう一息で無事越せる日が、目の前にきているのです」。「おかあさん」はこう結ばれている。



拒否したまま。それでも足りない」と学術会議に手と口を入れられるような法案を出したが、内外の学者とノーベル賞受賞者から猛反対を受けて取り下げた。政府の意向に添った研究をする大学には、補助金が多くあからさまだ。▲何を狙うのか、自分の気に入った国の戦争装備品に金を出し、紛争当事国には海外移転しないとした防衛装備移転3原則を見直すと言った。軍需産業を振興させ、もうけさせようという事か。

▲沖縄に新基地はいらない・作らせないと、いう決意を何度示しても、地元の民意を無視する自公の「民主主義」。▲原発事故12年経って何が分かった？溶解した原子炉の中も分からないし、何かあったら、何も出来ないんだ・と言う事が分かったんだ。でも、大企業から献金頂くために原発はやめられない。(石川)